

新・島根の中山間地から Work as Life

第6回
「隠居中年の青写真」

野中 浩一



1. 変化のとき

四月、大学生になった長女が家を出た。同じく四月、3人になった家族は、20年近く住み続けた里山の家を出て、都市部に移り住んだ。(※1)

中年の転機である。このタイミングで、長年続けてきた大切な仕事を人に譲り、多少の仕事と役割とを持つだけの半隠居状態になった。

あっという間に八か月が過ぎた。人と会い、勉強会や講習会に出て、本を読み、多少の仕事や役割をこなし、それでも有り余る時間は散歩をしたりゲームやスマホが埋めたりする生活が続いている。

そして今、海外に出て働く道を模索している。

2. 私の問題意識の断片

ここ数年、私は自身が運営するフリースクールを、若者だけでなく、家から出づらい中高年も含めて、多世代が混在して過ごせる場所にアップデートできないかと考えてきた。

「安全感があり、話し相手がいて、楽しい。集団が苦手でも、人と話すことが得意でなくても、自分なりの距離感とペースで人と関わることができる。人からも関心を向かれて、自分らしく生きられる、身近で小さな場所」のイメージである。

このような場所を実現していくうえで、私の中で関心があるキーワードを5つ挙げたい。

(1)協働調整

協働調整とは、人と人との「関係性」における「相互作用」を基盤とし、無意識的な神経生理学的な働きを含めた心身の相互調整が行われる状態を指す。親密な他者との「感覚、感情、自律神経」の相互作用（協働調整）の経験を積み重ねることで、この調整機能が内面化し、自己調整能力が身につく。これは、人間が社会の中で意欲的に活動するための情緒的・生理学的基盤の構築であり、活動のエネルギーを生み出す源泉であると考えられている。（※2）また、ステファン・ポージェスはその著書の中で、「安全であると感じられる状態」の大切さに言及するとともに、生理学的状態や行動を互いに協働調整するエクササイズとして「あそび」に着目している。

この「関係性における相互作用」について、神経生理学的観点から論じるステファン・ポージェスのポリヴェーガル理論、そして対話、意味、自己、および社会的現実から論じるケネス・ガーゲンの社会構成主義。この2人の論は分野も焦点も違うものであるが、私の実践からくる視点と「人の気力や意欲といった活動エネルギーの源泉は関係性の中にある」という部分において重なっているように感じている。

(2)生涯活躍のまち（ごちゃまぜで街づくり）

生涯活躍のまち構想の発端は、2015年6月に閣議決定された「まち・ひと・しごと創生基本方針2015」の中の、日本版CCRC（継続介護付きリタイアメント・コミュニティの推進）構想である。その後、多世代共生と地域包括ケアを基軸とした、高齢者コミュニティに限定しない「生涯活躍のまち」構想へと発展していった。

この構想の根底にあるのは、「年齢や障害の有無等を問わず、誰もが居場所と役割を持つコミュニティづくり」という理念である。現在までに多くの実践例が報告されているが、私は特に、雄谷良成氏を中心とした「社会福祉法人 佛子園」「公益社団法人 青年海外協力協会」「全国生涯活躍のまち推進協議会」の動きと連帶に注目している。

(3)コンヴィヴィアル

オーストリア生まれの思想家であるイヴァン・イリイチが、その著書『コンヴィヴィアリティのための道具』の中で提示した概念である。

イリイチは、コンヴィヴィアリティを「人間的な相互依存のうちに実現された個的自由であり、またそのようなものとして固有の倫理的価値をなすものである」と定義しており、産業化、標準化やシステム化、専門分化の正反対として位置づけている。また、別の言葉を引用すると「もし自分らがともに仕事をし、たがいに世話をあうことができるならば、自分たちは今より幸せになるのだという洞察を、人々がわけもつこと」と述べている。イリイチは自律性の尊重、相互行為の豊かさ、制度・道具の限界設定を訴えて

おり、人々の生活を一方的に管理し、依存させ、自立性を奪うラディカルな独占として、「教育・医療・産業・交通システム」を挙げている。

日本総合研究所の井上岳一は共著「コンヴィヴィアル・シティ」の中で、コンヴィヴィアルの訳語として「自律協生」の文字を当てている。そして、「今の社会の問題は、人口が減っていることより、人口が減っているのに居場所と出番をうまくつくれない人がたくさんいるということの方にある」としている。この点、不登校や発達障害などのレッテルをもつ若者と一緒に過ごしてきた私としては、大いに共感するところであるが、「うまくつくれない人がたくさんいる」というよりは「うまくつくれない状況がある」または「うまくつくれない人が増える土壌が今の日本である」という方が正確なように思える。

(4)文化人類学の視点 (※3)

私がものを考えるうえで拠りどころにしているのが文化人類学の考え方である。文化人類学とは、特定の文化や社会を相対化し、人間存在の多様性を理解しようとする学問である。初期の人類学は、西洋の自己文化中心主義（Ethnocentrism）を批判する中で発展してきたという歴史的背景を持つ。

文化人類学とは何か。九州大学のホームページにはこう書いてある。「文化人類学者たちは、（当時のことばを使えば）西洋から見た『未開社会』を、現地調査によって詳細に記録することを試みました。その成果を、民族誌という書物に残しました。文化人類学者たちの故郷から遠く離れ、厳しい自然環境のもと、不慣れな食べ物を口にし、難解な言語の壁を突破し、ひたすら現地の事情を知ろうという意志のもと、文字通り『フィールドで仕事』をしていたわけです。」また、文化人類学的研究のために必要な力として「常識を疑問視し、批判的思考を実践できる力、そして異なった世界を作り立たせている前提を想像し、それを内在的視点から理解する力」の2つを挙げている。なるほど、納得がいく。

松村はその著書の中で「マリノフスキは、人類学者がやるべきなのは『習慣と伝統によって規定された型どおりの面』と『実際にそれを行うやり方』、そして『住民たちが心にいだいている行為への解釈』の三つをとらえることだという。」そして「人類学は最終的に『人々のものの考え方、および彼と生活との関係を把握し、彼の世界についての彼の見方を理解すること』を目指す」と述べている。

(5)当事者研究

当事者研究は、北海道浦河町にある「べてるの家」における、統合失調症などをかかえた当事者の暮らしの中から生まれ育ってきたエンパワメント・アプローチであり、当事者の生活経験の蓄積から生まれた自助（自分を助け、励まし、活かす）と自治（自己治療・自己統治）のツールである。

べてるの家を設立したソーシャルワーカーの向谷地氏は、「当事者研究とは、（中略）当事者自身がみずからのかかえるさまざまな生きづらさを『研究テーマ』として示し、仲間や関係者と連携しながらユニークな理解や対処法のアイデアを見出して、現実の生活に活かしていくところにその特徴がある。」

と述べている。

3. 横串としてのケア

「多年代が自分らしく過ごせる居場所をつくる構想」を実現するうえで、前述した(1)～(5)のキーワードを貫く横串として、私は「ケア」を差し込んでいる。

- (1)協働調整 →関係性に基づく、個々人の内臓感覚としてのケア
- (2)生涯活躍のまち →日常の生活環境の中に組み込まれる構造的なケア
- (3)コンヴィィヴィアル →考え方や哲学としてのケア
- (4)文化人類学の視点 →文化・歴史の視点から問う学問としてのケア
- (5)当事者研究 →困難の中でリカバリーする技術（及び仲間とりカバリーし合う技術）としてのケア

これら(1)～(5)にケアの横串を差し込んだものが、私にとって「多年代が自分らしく過ごせる居場所をつくる構想」の理論的マニフェストである。

さらにこの横串である「ケア」を捉えるうえで拠りどころとなるのが、キャロル・ギリガンの「ケアの倫理」である。「『関係性』の中で、いかに他者に応答し、責任を果たすか」とのキャロルの視点を参考することにより、権利や規則などの「正義の倫理」と対比することができ、なぜケアの倫理における優良事例や評価された概念が、制度や政策に乗ると色あせて陳腐化しまうのか、その原理が理解可能になる。

それは下の表1が示すとおり、「ケアの倫理」とは、個々の状況と関係性のニーズに応じて柔軟に応答する姿勢である。これが、男性を中心として伝統的に高く評価されてきた「正義の倫理」に基づく普遍的な規則にものごとを当てはめようとする姿勢（＝既存の非コンヴィィヴィアルな構造）と混ざり合いにくい性質をもつためである。

表1 ケアの倫理と正義の倫理の比較

	ケアの倫理	正義の倫理
重視する価値	つながり、責任、応答、関係の継続、共感、親密さ、自分と相手が相互依存的である	分離・自律、権利、規則、公正、ゲームの継続、抽象的な原理、社会的地位と力の関係性（相互利益）の働き
判断の焦点	状況における具体的な文脈とニーズ	普遍的に適用可能な原理・規則
人間観	相互依存的な存在	自立・独立した個人

4. 夢パークと子どもの権利 ~地域と暮らしと根っこ

この秋、私は西野博之氏の講演会に足を運んだ。川崎市子ども夢パークやフリースペースえん等を運営する「認定 NPO 法人フリースペースたまりば」の理事長である。1986 年より不登校児童・生徒や高校中退した若者の居場所づくりに携わってきた西野氏の講話の中で「育ちの 3 要素は、遊ぶ、学ぶ、ケアです」という言葉が印象に残った。(※4) ここで西野氏はケアという言葉を「気にかける・関心をもつ」という意味で用いており、その必要性についてまったく同感である。

この夢パークを舞台とした映画「ゆめパのじかん」や NHK の「ドキュメント 72 時間」の映像を観ると驚くのが、大人も子どももフラットに関係しあい応答しあえる「遊び・学び・ケア」の場が長きにわたり実現している事実である。

もともと不登校は予後がいい。私の経験上では、発達に凸凹がある子たちも 17~19 歳くらいになると多くは自然と学校に通えたり、自分なりのやりくりができるものである。しかし、べてるの家を設立した向谷地氏の「みんなと回復していくなかに、(中略) 足腰の強い回復がある」という言葉が表すように、安心して集える場があり、自分を気にかけてくれる人がいて、話したり笑ったりできる仲間がいる中での回復は、ただの回復ではない。そこにはその子の将来をも支えてくれる足腰の強い回復がある。この夢パークにも、遊びや食を通じて人と人とが繋がり合う、共に生きる関係性からくる相互作用を強く感じる。

この場所が、不登校の子や発達に凸凹がある子など、ひとクセもふたクセもある子どもたちにとってもかけがえのない学びの場となっている要因に、「川崎市子どもの権利に関する条例」がある。下記リンクを読んでみてほしい。これは権利に関する条例という「正義の倫理」の中身を、「ケアの倫理」に委ねるという逆説的な試みでもあり、子どもたちに「なにもしない」ことを保障し、子どもたちの暮らしを取り戻すことを全面的に下支えしている。ただし条例はその運用や解釈によって「正義」に傾くか「ケア」に傾くかの塩梅が変わってしまうため、現状、運用と解釈を西野氏が行い、川崎市とタッグを組んでいる状況において、悩める子どもたちにとって有効で持続性のある居場所を実現できているのではないかと私は理解している。

川崎市子どもの権利に関する条例 <https://www.city.kawasaki.jp/450/page/0000004891.html>

さて、こうした素晴らしい事例がある一方で、このエッセンスを全国的に取り入れようとしてもうまくいかないのはなぜだろうか。(※5) 私流に解釈するならば、「ケアの倫理」に基づく場には、日々の暮らしと繋がっている「根っこ」がある。その確かな生活感とそこで育まれる有機的な関係性によって人も場も生き生きするのである、「正義の倫理」の土壤にその成功事例の要素（部分）を植え替えても根づくことが難しく、早晚腐ってしまうためではないかと考える。

5. メメント・モリ

47歳の私は、毎日のように死を意識している。

それは私が主としていたフリースクール運営の仕事を引退して、昼日中にお散歩がてらお弁当を買いに行く日々をおくっていることと無関係ではない。また、毎日拝んでいる仏壇の位牌に「俗名 野中時雄 享年五十三歳」「俗名 野中サツキ 享年五十五歳」と祖父母の享年が書かれていることもある。

第二次大戦後から、日本人の平均寿命は右肩上がりに伸びていった。それ以前の日本人の平均寿命を見ると、江戸であれ明治・大正であれ概ね50歳未満である。しかしこれは医療の未発達や戦争・疫病等の影響により幼くして亡くなるケースが多かったためで、幼くして死亡したケースを除いた場合の日本人の平均寿命（最頻値寿命）は、第二次大戦以前の時代においても概ね60歳くらいだったようである。

生物的な観点から、25歳から35歳くらいの間に子どもを産み、その末子が成人するのが55歳頃を考えると、医療や投薬による延命がない場合の寿命は概ね55歳から60歳とみてよさそうに思える。反対にその自然の摂理を超えて誰もが長命を求めた場合に、生命としての新陳代謝が滞り、本来の命のバトンの受け渡しの円環が歪むのではないかと心配になる。

もしその歪みが今の少子高齢化や晩婚化・非婚化だとするなら、私は個人的にはあまり死にたくはないのだけれど、どちらにせよいずれ枯れて朽ちる命なのであれば、本来の命の営みのとおりの時期に死ぬのがよいのではないかと考えたりもする。

だからこそ私は海外に行き、今の私が思いもよらぬ環境や状況の中で生きる人、その人たちを支えていけるコミュニティの中で生活を共にして、限りある命の中で自分らしさやその人らしさを模索し続けたいと考えている。そして、こうした関係性の只中で、適切な時期に前向きに枯れて朽ちることを願っている。

<語句注釈>

※1 里山から都市部へ

人口3万人強の中山間地域から、人口20万人弱の地方都市に移り住んだという程度の変化である。

※2 協働調整の影響

私は特に、考えを言葉で表現することが難しい乳幼児期の協働調整と、その不全により、学童期や思春期以降に意欲や気力が湧きにくい状態へのリカバリーとに関心がある。

※3 文化人類学の視点

村松圭一郎はその著書「旋回する人類学」の中で、ティム・インゴルドの言葉を引いて「人類学とは人々についての研究ではなく、人々とともに研究する学問だ」と述べている。そして私たち自身の生と私たちが調査をしている人々の生において、「私たちが彼らから進んで学ぼうとする場合にのみ現実のものとなりうる」として「他者を真剣に受け取ること」の大切さを説いている。また、インゴルドは「どのようにして私たちが住もう世界を知ることができるのか」（＝認識論）ではなく、より根本的な「私たちが知っている世界はどのようにあるのか」（＝存在論）という問いを投げかける。

※4 印象に残った言葉

本編とはずれるため注釈に載せるが、西野氏の言葉でもう1つ強く印象に残った言葉がある。それは、「遊ぶことを通じて非認知能力が高まるのであって、非認知能力を高めるために遊ばせるんじゃない」という言葉である。

※5 うまくいかないのはなぜだろうか

半ば私が決めつけていた表現になっているが、事実としてもそのとおりではないだろうか。

<引用・参考文献>

生涯活躍のまち第66号（2025年9月）

ステファン・W・ポージエス著、花岡ちぐさ訳（2018）『ポリヴェーガル理論入門 心身に変革をおこす「安全」と「絆」』春秋社

内閣官房・内閣府総合サイト <https://www.chisou.go.jp/sousei/about/ccrc/index.html>

イヴァン・イリイチ著、渡辺京二・渡辺梨佐訳（2015）「コンヴィヴィアリティのための道具」筑摩書房
井上岳一・石田直美編著、高坂晶子ほか著（2025）「コンヴィヴィアル・シティ 生き生きした自律協生の地域をつくる」学芸出版社

九州大学ホームページ「九州大学と九州大学大学院で学べる文化人類学」 https://www2.lit.kyushu-u.ac.jp/~com_reli/anthropology/

松村圭一郎（2023）「旋回する人類学」講談社

当事者研究ネットワークホームページ https://toukennet.jp/?page_id=2

向谷地生良（2009）「技法以前 べてるの家のつくりかた」医学書院

キャロル・ギリガン著、川本隆史・山辺恵理子・米典子訳（2022）「もうひとつの声で——心理学の理論とケアの倫理」風行社

Yahoo ニュースコラム（荒川和久）

<https://news.yahoo.co.jp/expert/articles/015b2416505d2a0abb07fe2e4ba71cc4ac582db0>